

(様式7-3)

政務調査活動・先進地調査等 報告書

令和5年6月8日

三田市議会議長 松岡信生 様

本会派（私）は、政務調査活動・先進地調査等報告書を下記のとおり提出します。

会 派 名	盟政会	代 表 者	福田 秀章
		議 員 名	
派遣者氏名	福田秀章・今北義明・森本政直・幸田安司・小杉崇浩		
視 察 先	① 北海道浦河町 ② 北海道開拓の村		
調査事項 (調査目的)	① 浦河町と三田市のつながりについて ② 北海道開拓の歴史について		
日 時	令和5年4月26日(水曜日)～令和5年4月28日(金曜日)		
視察先対応者	① 浦河町 佐々木孝雄(浦河町議会議長) 浅野浩嗣(教育長) 長崎哲之(企画課長) 和田修(議会事務局長) 伊藤昭和(博物館副館長) ② 北海道開拓の村 中島宏一(北海道開拓の村館長)		
添付資料	当日配布資料添付 当日写真		

交付対象議員は会派名、議員名を記入してください。(代表者名、派遣者氏名は不要)

調査日時

令和5年4月27日（木曜日）10:00～12:00

視察先 浦河町役場

調査事項 浦河町と三田市のつながりについて

（調査結果の概要）

【説明と質疑】

●教育長及び副館長の説明

1. 赤心社の開拓の精神がどのように受け継がれているか。

江戸から明治へと大きく時代が変わる中、多くの人々が北海道に移り住み、現在の生活の基礎を築いてこられたが、赤心社は、現存する唯一の移民のための会社組織として、今もなお浦河の地で事業を続けている。

各地から集まった人たちが心を一つに移民団として北海道の厳しい気候風土のなかで開拓移住のための努力を続けてこられたのは、会社設立の精神とキリスト教精神によるものが大きいと考えられる。

会社設立の精神は、「我が同士愛国の諸君よ、僅かの酒食料を投じて末永く子孫の生活の場を固め、合わせて報国の赤心の気概を持って参加しようではないか」とその会社設立の趣旨にあるように、自らの事業を発展させることを通じて国家を繁栄させようという目的もあった。

キリスト教の精神は、設立の中心人物である鈴木清、澤茂吉らが熱心なキリスト教者であり、キリスト教的な理想を基に教会を中心に地域コミュニティを形成しながら事業を進めてきた。

赤心社の活動から生まれた浦河教会や私立赤心小学校（のちに荻伏小学校へと引き継がれる）は現在も活動を続けており、「開拓者精神・フロンティアスピリッツ」を赤心社を通じて身近に感じることができる。

2. 愛荻舎が取り組んだ農教育はどのような影響を与えたか。

愛荻舎は、大正14年に荻伏小学校附属農場として、小学校の物置の一隅で乳牛一頭の飼育からはじまった。その思想は、「真の教育を求めて、愛荻舎を設立し、子供たちと共に、作物を培って人間をつくり、家畜を飼うことによって魂を養った…教育に新しい息吹を与え、北方農業の確立に心をくだき…」と沢吉夫の顕彰碑に刻まれているように、「学びと働く尊さ、心の育成」といった人間教育の実践に努めた。

愛荻舎の活動は、昭和23年に戦後の学制改革により終止符を打つことになったが、その信念は現荻伏小学校及び浦河町の教育思想のベースとなっている。

3. 浦河町と三田市が交流を進めるにあたって大切にしたいことは何か。

浦河開拓の大きな担い手である赤心社を縁にした歴史的なつながりを大切に、未来に向かって産業、文化など互いの地域の発展に資する新たなつながりが広がり、深まる交流を進めたい。

●質疑

1. 現在の姉妹都市とのつながりは？

熊本県の天草との交流が平成4年に始まり、平成8年に天草下島にある河浦という町と

の友好交流都市として締結した。合併により天草市となった後は、国内交流はリセットすることになり、友好交流都市ではなくなった。その後、100周年を機に、改めて天草市との友好交流都市となり、現在も活発に交流している。

兵庫県の豊岡市との交流も以前はあったが、現在は続いている。

2. 今後の三田市と浦河町の交流の進め方は？

学校間による教育的な交流から始め、観光面や産業面での交流も進めたい。

天草との交流では、各小中学校から1名ずつ毎年お互いに訪問している。

三田市教育委員会が作成した読本を浦河の小学校でも子供に読んでもらい、感想文を書いて三田市に送っている。今後、深めていきたい。

3. 浦河町のサラブレッドの飼育はどう始まったのか。

もともと国による軍馬の育成が始まり、地元の人に競走馬の飼育が移された。JRAの施設ができたこともあり、イギリスから競馬文化が入ってきたこともあり、現在のサラブレッド育成につながっている。

4. 開拓当時の主要産物は何だったか？

米は難しかったので、いろいろと施策したうえ、大豆が中心となった。赤心社の醤油、味噌製造につながった。

【見学】

赤心社記念館、開拓功労者胸像、開拓記念碑の見学を行った。(写真参照)

調査日時	令和5年4月28日(金曜日) 10:00~12:00
視察先	北海道開拓の村
調査事項	北海道開拓の歴史について
(調査結果の概要)	
<p>北海道の開拓が行われたのは、明治維新以降のことである。道内の広大な土地が明治に入るまで開拓が行われていなかったことは、奇跡的であるといわれている。開拓の際に設けられた主な施設は、ビール工場(現在のサッポロファクトリー) 鉄道、炭鉱、札幌農学校、さっぽろ時計台等がある。そのなかでも特にビール工場や鉄道、炭鉱は産業を発展させるために設けられたと言われている。</p> <p>北海道開拓の村は明治から昭和にかけて建てられた北海道各地の建築物を54.2%の敷地に移築復元、再現した屋外博物館であるとされている。</p> <p>敷地内の建物には農村群、山村群、漁村群、市街地群と建造物がそれぞれ分かれて再現されており、順番に村内を回遊できるようになっている。</p> <p>村の中心には馬車鉄道(4月~11月)が走っており、レトロな建物が並ぶ馬車からの風景は、時代がタイムスリップしたかのように感じます。</p> <p>正面入口の洋館の旧開拓使札幌本庁舎1869(明治2)年、明治新政府は、草原と原野であった札幌を北海道の政治の中心とすることに決め、新しいまちづくりのなかで、役所や学校、お雇い外国人教師の官舎などには西洋風の建築スタイルが取り入れられた。</p> <p>そのシンボリックな建物として1873(明治6)年10月に開拓使札幌本庁舎が完成しました。しかし、1879年に火事で焼失しました。また前日に視察に行った浦河町の旧浦河公会会堂(明治27年建立)は北海道の開拓会社として神戸の赤心社が設立され、翌14年から西舎村や荻伏村に結社移民として入植しました。「赤心社」の指導者の多くはキリスト教徒で、明治19年(1886)に「浦河公会」が組織されました。この会堂は、17年の日曜学校兼会堂に次ぐ、2代目の礼拝・集会所です。正面から見ても教会のような三角屋根と内部は教会の作りそのものでした。開拓の村の「旧浦河公会会堂」はキリスト教徒を主とする団体移住者たちの心のよりどころとなった建物でした。</p>	

交付対象議員は会派名、議員名を記入してください。(代表者名、派遣者氏名は不要)